

柳樽に見える中国

田中克己

江戸時代の庶民芸術として発明された川柳は、いまだに庶民の間に大きな魅力をもっているが、このごろは岩波文庫にも『柳多留』、『柳多留拾遺』、『初代川柳選句集』と次に刊行されて手に入り易くなった。川柳という一般称は、前句付から五七の十二字だけを独立させた柄井川柳（享保三年生、寛政二年没）の号にはじまる。その没年は恰かも松平定信の寛政の改革に当り、「役人の子はにぎにぎを能くおぼえ」などの幕政非難の句やバレ句がみな刊行を禁止されたのであって、芸術的にも幸せな生涯だったといわねばなるまい。

わたしの手許には文庫のほか、大正二年国民文庫刊行会

版『川柳集』があり、柄井川柳没後の第四十五篇までを収め、また大正十三年国書刊行会版『誹風柳樽全集』があって、これは六十篇までを収める。わたしは最後のものを一覽して、後になるほど中国を題材としたものが多くなるのに気がついた。これは川柳が題材を豊富にするために中国を対象とせざるを得なかったことを一原因としているが、寺子屋の普及、文化文政の元明小説の翻案などと傾向を一にするものといわねばなるまい。

柄井川柳の没後三年にして松平定信は退職し、寛政十一年には京伝の『忠臣水滸伝』が発刊されはじめ、文化三年には馬琴の『椿説弓張月』、同じく五年には同人の『三七

全伝南柯夢』（六年には秋成の『春雨物語』）。十一年には馬琴の『南総里見八犬伝』など、江戸文学の中心は京坂より江戸に移るのである。この間、元明小説の知識階級に読まれたことはいうまでもない。『唐詩選』や『十八史略』は『論語』、『孟子』、『史記』などとともに士大夫の書齋に必携の書となったのである。序文はこれくらいにして、各項で川柳にあらわれた唐土の人物を挙げてゆくこととする。

一、楊貴妃と玄宗

この二人の哀恋は、明和二年の二篇に見えるのがはじめで、

玄宗はなきなき耳のあかをほり
というのである。自分の命で馬嵬坡で高力士に楊貴妃を縊殺したあとで玄宗がその死を悼んだことは白楽天の『長恨歌』に巧みに詠じられている。

楊貴妃を上へきらくを先づたづね

が七篇に見える次の句で、明和九年の刊行である。『長恨歌』の「上窮碧落下黄泉」との箇所に掲げているが、天界の碧落を玄宗の命で訪ねたのは、『楊太真外伝』によれば

道士楊通幽で、ここでは楊貴妃は見つからなかったのである。次は同篇の

やうきひへ長いうちわをさし懸る

で、二人の恋愛の全盛時代を写す。次は八篇で、寅（明和七年）十月より卯（明和八年）十月までの句である。

玄宗はおむく紵王きやんが好き

紵王のことは後述する。おむくは『長恨歌』「楊家有女初长成、養在深閨人未知」の箇所にもとづく。次は九篇のやうきひを湯女に仕立るりさん宮

であり、『長恨歌』の「春寒賜浴華清池」にもとづき、長安の東、驪山のふもとの温泉宮のあとはいまも中華人民共和國の人民の遊覧の場所である。同じ篇に

七月の八日玄宗つつうする

比翼連理を誓ったのは七夕の夜、温泉宮のことだったというのが『長恨歌』である。

次は十二篇の

おめかけの一門あまたうかみ出で

同じく『長恨歌』の「姉妹兄弟皆列士、可憐光彩生門戸」をとり、姉三人が国夫人の称号を受け、従兄楊国忠が宰相となったのは史実である。次も十二篇の

美しい顔でれいしをやたらしく

は宋の樂史『楊太眞外傳』に「妃子既生於蜀、嗜荔枝。南海荔枝、勝於蜀者、故每歲馳馭以進。方暑熱而熟、經宿則無味。後人不能知也」に拠ったと思う。荔枝はムクロジ科のレイシ *Litchi chinensis*、南シナの広東・福建二省の原産の果物である。楊貴妃の生まれは父が蜀（いま四川省）の司戸という小官だったからであるが、本籍は弘農華陰（いま陝西省）でのち蒲州永樂（いま山西省）に遷ったので、幼少から荔枝を食ったとは思われない。次は十三篇の

春秋は池へおし鳥おりるなり

は『長恨歌』の「歸來池苑皆依旧、太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉、对此如何不淚垂。春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時」という箇所¹に依る。比翼連理を二人が華清池で誓ったことになっている。

十三篇の

八日にはやうこく忠へかぞうなり

は七夕の連理のちかひのあと楊国忠が増俸になったことといい、

雙六のそばにれいしのうづたかさ

はまた荔枝が出て来て、二人が雙六の遊びをしたことは、

正倉院の雙六盤の遺物で多分あったことだろうと思わせる。同じく

見ましたは細おもてだともめる也

も楊貴妃の豊艶なのに対し、細腰の梅妃に嫉妬したとの宋人の小説がもとであろう（『梅妃伝』）。

安永八年刊の十四篇には

れいしよりだつきはふりがきつい好

は楊貴妃と殷の紂王の寵妃妲己とを比べている。妲己については後述する。同じ篇の

一チ女出世して九ウぞくうかむ也

は前述の句と同じく楊氏一門の寵榮を詠じている。

すご六なかば国忠さま御落馬

との注進にさぞ朝廷は大騒ぎとなったろうといっているのである。

十五篇には

あたい千金の御はなし相手也

春宵一刻価千金は蘇東坡の句であるが、『長恨歌』の「春宵苦短日高起」を東坡が採ったのである。同篇

やうきひも元かつがれた女なり

はその入内は玄宗の御意だったとの意味である。『長恨歌』

は唐人の作であるから諱んでいわないが、もと玄宗の愛子
寿王の妃であったことは周知の事実である。

役所に三時着座するつらい事は

の句は私見では『長恨歌』の「從此君王不早朝」だと思
うがどうであろうか。

十六篇は丑の年すなわち天明年の句かと思うが

むごちない事をばくわいが原でする

とあり、まぎれもなく馬嵬坡の楊貴妃の最後である。十八
篇の

やうきひはいふ程の目の出た女

は凡句。同じ篇の

やうきひはるくな一家はもたぬ也

は楊氏一門の榮華を諷する。

十九篇は天明四年の句集で

やまと言葉はおくびにも貴妃出さず

は唐音ばかりの貴妃、管絃に長じたが作歌には無能だつた
ろうというのであるが、その日本生れの説のあったことは
後の句に見える。

そう申しや御合點だよと貴妃はいふ

は『岩波文庫』で訂正したが、安永九年の作、政權に口出

しをする貴妃を詠ずる。

国忠を伯父さんとろくさんはいひ

は『旧唐書』安祿山列伝に見えていて、わたしは『中国后
妃伝』(筑摩書房、昭和三九年)にこれを訳して、

「彼(安祿山)はしばしば玄宗に甘言を呈した。その一つ
として伝わっているのは、楊貴妃の養子となることを乞う
たことである。帝も妃もともによるこび、楊貴妃は宮中で
これを裸かにして洗い、おしめをさせて女官らにかつがせ
て笑い興じ、皇帝はまた襪褌きんぎょを賜ったという、おろか
な行事が伝えられている(中略)玄宗は大いに悦び、楊銚
以下の一族には、みな兄弟姉妹の約束をさせたという」と
した。これによれば楊国忠はまさしくは楊貴妃の従伯兄いとこで
あるから、母の兄として伯父と称せられたのである。

二十篇は天明乙巳(五年)の集で

あつちからは玉藻こつちからは貴妃

玉藻の前のことは後述する。三国伝来の狐の精である。
楊貴妃はこれに対し日本から渡唐したとの民間伝承があつ
たのである。

日本にかまいなさるなと貴妃はいひ

日本生まれであるから玄宗にそういったらうというのが

庶民の智慧である。

二十二篇は天明八年の集で

さいあいの夫人に別れやけに成り

玄宗が最愛の武恵妃に死別したあと、息子の妃を奪ったことをいうのである。

二十七篇は寛政九年の集で、二十六篇はその前であるが、柄井川柳死（寛政二年）後の集である。

屋敷中やうこく忠が幅をする 尾上

と作者名が挙がっている。同じく二十六篇に

上下うへしたに楊貴妃のある真ッ盛り 尾上

作者も同じである。同じ篇には

たづねにくいのは小督より楊貴妃 三交

というのがあり、『平家物語』の小督は嵯峨にゐたが、楊通幽の搜索した楊貴妃は死して海上の仙山蓬萊宮にいるので、なかなか訪ねあてなかったというのが、『長恨歌』の末節である。

前述した寛政九年に成った二十七篇には

天地の出合楊貴妃織女なり

『長恨歌』の末句に近く「七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」の七月七日から

織女星となったというのである。

三十篇は宝暦七年よりの句が文化元年に集められたので

雙六とれいしの側に美しき

ともう陳腐である。

三十一篇は文化二年の作

これからは楊貴妃様だとそびき

「そびき」は『新潮国語辞典』によれば「いざなう」の意がある由だから牡丹の前に桜見に玄宗を誘うのである。

三十五篇は文化三年の序文があり

楊貴妃は馬捨場にてさいごなり 農子玉章

馬嵬坡を馬捨場としか読めないのである。鹿子は作連の名である。

三十六篇は「卯の春」の序文、すなわち文化四年の撰で

能い垢を落して光る后也 香貞

は華清宮の入浴を詠ずると見られる。

三十七篇も同じ年の撰

髭のない楊国忠がのしり 柳雨

と見える。楊国忠を宦官と誤解したのであろう。三十八篇は同じく卯の年の暮の撰

楊貴妃も小町もいづれ花の王 里鶴

と見える。楊貴妃が牡丹であることは明らかであるが、小町の名を冠する花はキク科コンギクの花色が淡紫のままなのをいう由(牧野富太郎『新日本植物図鑑』昭和四十八年、二十四版)であるから、ひとまずこれに当てておこう。

三十九篇は文化卯の年というから四年の撰で

御茶壺のよふに驪山へ荔枝来る 孤雲
相変らず驪山のふもと華清宮である。

五十一篇は文化七年の撰で

しつこい笛の音のする驪山宮

と同じく温泉の管絃をとらえる。ただし『楊太真外傳』によれば、宴曲の場所は清元小殿で、寧王(玄宗の兄)は玉笛を吹き、妃は琵琶、馬仙期は方響、李龜年は觿築、張野狐は箏篋、賀懷智は拍、奏した曲は玄宗の新曲「紫雲廻」と「凌波曲」であったという。

色けしなのは五十五篇(文化八年撰)の

うつくしい顔で楊妓妃ぶたをくひ 平喜

で、肉は猪、鯨の時代の日本人の想像を思わせる。

五十六篇(同じく文化八年撰)には

楊貴妃は星をお先にして契り

とまた七夕の夜の契りが詠じられ、同じ篇に

楊國忠が威をくじく國家老 里遊

は玄宗を江戸にいる大名に比している。諛言をする宰相宋璟、張九齡らは天寶の代にはもういず、右相李林甫は玄宗以上に奢侈を好みもっぱら私利を追うに汲々としていたのである。

五十八篇は十返舎一九の序文のある文化辛未(八年)の撰であるが、その次の五十九篇には

国に無い花に楊貴妃名を残し 三松

とあって、また牡丹(キンポウゲ科 *Paeonia suffruticosa*)と傾国の美人とをうたう。日本に牡丹の渡来したのは白井光太郎『植物渡来考』(昭和四年版複製五十年版)一五九ページによれば、天曆(村上天皇年号)以前であるという。『和名抄』フカミクサ、『藻塩草』ハツカグサの和名は遂に用いられなかったのは、『延喜式』典葉寮にその皮を伊勢、備前、阿波より進貢とあるので、専ら皮の薬用に限り、花の鑑賞は崇徳天皇のころより和歌や詩があることで珍らしい花だったのである。

二、紂王と妲己

わたしの好みで唐代から記したが遠く遡って殷代の末、

傾国の美人が現われた。司馬遷『史記』卷三股本紀には殷

のことを記して、「帝紂資辨捷疾、聞見甚敏。材力過人、

手格猛獸。知足以距諫、言足以飾非（中略）好酒

淫樂嬖妲己（中略）以酒爲池、縣肉爲林（中略）爲長

夜之飲（中略）刑有炮烙之法（中略）周武王於是遂率諸

侯伐紂、紂亦發兵距之牧野、甲子日紂兵敗、紂走入

登鹿臺、衣其寶玉衣、赴火而死。周武王遂斬紂頭、

懸之白旗、殺妲己（下略）」とある。

さて『柳多留』では十二篇に

誰ぞが首を切りなよとだつきいひ鶴龜運千路

とある。十二篇は西の年、すなわち安永六年、蕪村が「春

風馬堤曲」を作った年の撰である。紂王が殺戮をほしいま

まにしたことも『史記』には見えていて、「西伯昌（周の文

王）、九侯、鄂侯を三公としたが、九侯の好き女が淫を喜ば

なかつたので、これを殺し、九侯を醢ほしやくにし、鄂侯が争う

とこれをも脯ほしやくとし、西伯昌を姜里きやうりに囚とらえた。また比干が

強く諫めると『聖人の心には七つの竅あながあるそうなの』とい

って、比干を解剖してその心臓を見た」と記す。妲己がこ

れを勧めたことは記していないが、その責任は西伯昌の子武

王に殺されたことで明らかである。

十四篇は安永八年の撰であるが

ちう王のどら人だねがつかざる也抑水道石斧

とあって王の刑を好んで殺戮をほしのままにしたことを詠

ずる。

十八篇は卯の年すなわち天明三年の撰で、

きつねの嫁いりちう王のそこへ来る

と妲己を周の褒姒（後述）と同じく狐あつかいにしてい

る。

二十三篇（西すなわち寛政元年の撰）には

こびりついて、ちう王に殺させる 可候

というのが見える。同じく重刑を紂王にすすめたというの

である。

三十七篇（文化四年撰）の

あまたの唐人きこへませぬと泣き 二蝶

も殷の紂王の重刑を詠じたのであろう。

四十五編（辰すなわち文化五年撰）には

今の世もさいご小便する姐妃 矢正

というのが見える。汚い句で姐己の生涯が処刑で終わったというのにすぎない。

四十九編（文化七年撰）には

金毛織九鳩あたりへ姐妃しめ 雨且

というのが見え、九鳩が難かしいが、『中國醫學大辞典』（謝觀編、商務印書館、民国十年序）には「九宮八風篇」というのが見え、「内論歲神所居之宮有九、而八方之客風能病人」とあるから九鳩の同音をまちがえたというのが私見である。紂王と姐己に関しては他に見えない。

三、幽王と褒姒

周の幽王に關しては『史記』卷四周本紀に

「三年幽王嬖愛褒姒、褒姒生子伯服。幽王欲廢申后并去宜白、以褒姒爲后、以伯服爲太子（中略）褒姒不好笑、幽王欲其笑萬方、故不笑。幽王爲燧燧、大鼓有寇至則舉燧火。

諸侯悉至、至而無寇、褒姒乃大笑。幽王說之、爲數舉燧火、其後不信、諸侯益亦不至（中略）。廢申后去太子也、申侯怒與繒西夷、犬戎攻幽王、幽王舉燧火徵兵、兵莫至、遂殺幽

王驪山下、虜褒姒、盡取周賂去」とあり、『太平記』にも

「燧火萬里の詐」ということが「鎌倉合戦事」の条に見え、また「新田左兵衛義興自害事」の条にも「褒姒一度笑で幽王傾国」と見えて、西周の滅亡はこの一笑に因ったのである。川柳にはこれを詠ずることが数多く

つんとしたのに幽王はくらいこみ（七篇）

たった一度に百笑ふうつくしき（十篇）

皆人を笑ひなくすと臣下いひ（十二篇）

花火見るたび御妾は笑ふなり（十三篇）

ゆふ王はこそぐる事に気がつかず（同右）

花火にしんだいゆう王入れ上げる（十八篇）

きげんよくゆふ王身代をつぶし（二十一篇）

と一笑傾国の趣を詠じている。

次に褒姒については本性は狐で、天竺では班足太子の妃、唐土では褒姒となり、日本では鳥羽院の宮中に入って玉藻の前となのり、種々の悪をなしたあと安倍康成に見あらわされ金毛九尾の狐となって那須に逃げ、上総介、千葉介に射殺されたが、今だに殺生石として諸人を悩ましているのであるという。

川柳にはこれも多く詠じられている。

御後のわる尻をいふ陰陽師(柳多留初篇)

天ぢくの唐のと玉藻なれたもの(十一篇)

かがみにて見ればきつねの天下一(十二篇)

鳥のはねすでに狐が喰ふところ(同右)

鳥の羽は鳥羽天皇である。

くわい／＼のくわいと下野さしてとび(十四篇)

さつさつと玉藻唐本よんで居る(十六篇)

やすなりはしやうねのしつぽ見あらわし(十八篇)

せんぎして見れば玉もは無宿也(十九篇)

大きなぎつねつきをやすなりおとし(二十篇)

から天竺はけつの毛をかぞへられ(三十一篇)

四、始皇帝と徐福

女ばかりを語ったから、わたしの先祖(『中国の自然と民俗』昭和十五年、研文出版を参照されたい)始皇帝の句を

あげよう。川柳ではなかなか人気者なのである。

『柳多留』四篇に

始皇から見れば清盛小僧なり

と見えるのが初見で、明和六年の作。専制君主として確認

されたのである。

あほう宮をとこの声は始皇なり(十篇)

笠合羽かんやう宮をかつき出し(十一篇)

始皇帝雁をとらまへそうにする(十一篇)

みな咸陽宮(阿房宮)を題材としている。

三百里もちをふらせる始皇帝(十一篇)

は咸陽宮落成の祝の餅まきをい

始皇帝口がいやさに生きうづめ(十二篇)

もんもうなやつをばうめぬ始皇帝(同右)

草ぞうし迄もとりやげる始皇帝(十三篇)

は始皇帝の焚書坑儒を詠ずる。

いさめると穴だと始皇おどす也(十三篇)

がん／＼と始皇のみみのわきでなき(十八篇)

へんな事始皇ちんぶんかんきらひ(同右)

は儒者たちと始皇帝をうたい

始皇帝かべの中には気がつかず(二十二篇)

は壁中に隠された『古文尚書』のたぐいをいう。作は天明

八年、松平越中守定信が老中となり翌年は寛政元年、時事

を扱った黄表紙類が絶版を命じられるが、『柳樽』も例外

でなく「役人の子ハにぎ／＼を能寛」(初篇)は「めつちち

は大イじめくらへむごくする」との句にさしかえられるのである。

二十六篇（寛政九年撰）の

ばひく／＼儒者もゆるすなと始皇下知 雨譚

は定信失脚（寛政五年）後の作である。

始皇帝が東海の仙薬を採りに徐福をして童男女数千人を乗船せしめたのは『史記』卷六始皇本紀にその二十八年（前二一九）のことで、焚書坑儒はこれよりあと三十四、三十五年の二年間のことである。さて徐福（市）についてはその崩ずる年に復命して「蓬萊に行こうとしたが大鯨魚にさへぎられてゆけなかった」といい、始皇帝はこのあと之罪（いま山東省煙台市）から平原津（いま山東省德州市平原）に至って病にかかり、崩ずるのである（三十七年すなわち前二一〇年）。このおよそ十年間を『柳多留』は

来は来たがはなし相手のない徐福（九篇）

薬とりとうく始皇まぢぼうけ（十一篇）

へん病が来たと熊野で人だかり（十五篇）

と熊野へ着いたことにしている。ただし着船場は三十五篇（文化三年撰）では

清見瀉あたりへ徐福船をつけ 鷹子琴我

とし、三十九篇（文化四年撰）では

表棍に不二へ引向け徐福来る 巾布

と同じく不二の見えるところに行っている。これは四十一篇（文化五年撰）でも同じことである。

長崎で駿河路を先づ除福聞 未覺

と見えている。興津・蒲原あたりが考えられたのであるが、蓬萊の山を富士とし、江戸時代唯一の開港地である長崎へ徐福がまず着いたとするのが、はなはだ庶民的である。同じ篇にはまた

三保が崎あたりを五湖と除福誉め 青露

とあり、これならいまの清水市である。

五、和藤内（国姓爺）

わたしは昭和九年東大東洋史学科の卒業で論文は「清初東南沿海遷界考」というのであった。この論文作製のためと称して昭和八年台湾行を決意し、父から百二十円出してもらって八月七日神戸より上船、八月十日基隆着、台北市北門町一三榕樹館に宿泊し、書院町の図書館に行ったが、本が少なく、十一日尾崎秀真翁に逢って台湾六千年史を承

つた（翁はゾルゲ事件で有名な秀実氏の実父で、秀樹氏はその次男である）。翌十二日は大稻埕を歩き、卜師から筆談で「往東南方吉、貴人有平安、得財、八月二十外去吉」との卦を得、翌日台南に向い、安平（鄭成功の死んだ地）へゆき、紹介してもらった製塩会社に勤めている日本人のお宅に泊めてもらい、十四日は台南市を見物し、赤嵌楼にゆくと、文昌閣というのがあり、案内の女の子に文昌星は「孔子様より前に文学を作られた人、顔が醜くくて用いられなかつた」との説明を聞いた。この建物はオランダ人の建てたプロヴィンシア城の址なのである。ついで関帝廟に参り、媽祖廟にゆき、またおみくじ五十六番を引くと、大吉で「種得藍田璧一雙、鳳凰相感爲翮翔。貴人真有非常遇、代代兒孫得吉昌」ということであつた。孔子廟に参り名宦祠に祭られる者十人と東廡に祭られる儒者七十七人、西廡に祭られる七十三人の名を写し、大成殿では孔子の神位の両側に顏淵、曾参、子思、孟子の神位のあるのを見、次に開山神社（鄭成功の廟）に参り、崇明伯甘輝、戸官建安伯張萬礼が鄭成功の部下で最も優遇されているのを知つた。この日は撰氏三十七度七分台湾領有以来第二の暑さであつたがめげずに宿泊し、翌十五日二水、水裡坑、水社にゆき日月潭の

見下ろせる涵碧楼という旅館に泊つた。但し魚池を経て埔里まで行って引返して来たのである。翌日、水裡坑ではじめて高山族に遭い「おまへ自動車を畏れて橋桁につかまつた夷よ、おまへ弊れた紅の衣をつけた垢だらけの夷よ、おまえ氷屋の前で矮い背を見せた夷よ」と高山族の男四人女一人子供一人を写生している。この日に台北に帰り、翌日は台湾の盂蘭盆を見、動物園にゆき毒蛇類を見、双思樹の歌というのを作つた。「みんなみの島びさすらふわが上をもきみ忘れずにあませとの木ぞ」というのがそれである。城隍廟にもゆき、またおみくじを引いた。翌日はまた凶書館にゆき、台湾の神仏が必ず台風を起すと信ぜられていたのを知つた。八月二十日尾崎翁にお別れの挨拶にゆき八月二十一日大和丸で基隆を出帆した。二十二日甲板で知りあつた東京へ留学する三人の学生と仲好くなり、「萍水相逢」と書いてもらい、二十四日に帰宅した。このあとが大変で、九月からは駒込の東洋文庫に日参して地志を見た。ただし十月九日は『詩と詩論（文学と改題）』の終刊の夕に列席し、江間章子氏、辻野久憲氏らと遭つた。主賓はもとより西脇順三郎教授で、お傍にも寄れなかつた。卒論は遷界といつてナポレオンが行なつた大陸封鎖を、清朝が鄭成

功に対して実行したことにしほった。十二月二十日が締切りだがわたしは十日前に脱稿し、製本を赤川草夫という詩人の印刷学校につとめる人にしてもらい、二、三日前に提出した。余事が長くなったが国姓爺鄭成功とわたしとは、専家石原道博博士より古いのである。さて「川柳」初篇は昭和二年の刊行で

和藤内一家の義理はかきどうしとあり、近松の『國性爺合戦』では母と妹の甘輝の妻錦祥女をも死なしているのである。

『柳多留』四篇(明和六年刊)の

和国とは虎とあらそふ家名なり

というのも『國性爺合戦』の「千里が竹」の国性爺の虎狩りにより、九篇(八篇が安永二年、十篇は安永四年か)刊の

上るりの通俗ものはこくせんや

とあるところから見ると、近松六十三歳の正徳五年(一七一五年)より六十年間愛誦されたのである。もとより近松の作は国姓爺鄭成功の死(寛文四年、一六六二年)より五〇年後、芝居では忠臣になつてゐる呉三桂の韃靼にそむいた三藩の乱の勃発(一六七三年)よりもあと、その死(一六七八年)、鄭氏の降服(一六八三年)よりも三十年近くたつて

いる。『華夷変態』など内閣本は我々のように見られなかつたとしても、三十一篇(文化二年)の

とらがはかもろこし原の近所なり

と鄭成功の虎退治はあとまで忘れられないのである。和藤内が和でも唐でもないの洒落であることはいうまでもないが、過目ふとしたことから信州高遠藩主内藤さまの令嬢と知り合いになり「牡丹に唐獅子、竹に虎、虎をふまえて和藤内、内藤さまは下り藤」を合唱した。内藤新宿は甲州街道の第二宿。いまま新宿区内藤町一番地に令嬢はおすまいである。

六、寺小屋

寺小屋の称は『改訂新潮国語辞典』によれば延享三年(一七四三年)竹本座初演の並木宗輔作『菅原伝授手習鑑』に見えるのがはじめの由である。『柳多留』八篇は寅の十月から卯の十月までの選というから明和七年(一七七〇年)から翌八年の作であるが、その中に

子曰のたまひむしが通して切りもぐさ

の句が見える。『論語』の素説でかんの虫が起つたのであ

る。

二十篇は天明乙巳（五年）の作であるが、

子はツかり出来てみじめなそどくの師

というのがあって『千字文』からはじまって『孝経』、『論語』の素読を教える寺小屋の先生は品行方正、子供が多くできるのである。わたしは五子（内一人は夭折）、十孫の父であり祖父であることを幸福に思っている。ただし扶養手当では子供は養えないことはこの二十年間のわたしの体験である。

二十一篇は天明六年の撰であるが、序に「此篇の初丁は、十四五とせ以前迄此道に名をとり給ふ若ての上手名吟多かりしに、おしいかな世を身まかり給ふ、予うる寛えながら彼秀吟をかきあつめ頭はせし云云」とある。さて句は師のかげを七尺さるともうあそび

よくできた句である。「三尺」と「七尺」のことは拙著『中国の自然と民俗』一三一ページにかいた。ご覧いただきたいが「七尺去テ師ノ影ヲ踏ズ」が原典である。二十二篇も同じく素読の先生の貧をい

小人せうじんに店をおわれるそどくの師

で、借屋の追い立てを食うのである。わたしも一回経験が

ある。また二十五篇は寛政六年の撰であるが

水姓の字をくり出して孔子付け

とあるのは『史記』孔子世家に

孔子生鯉、字伯魚

というのによつたことはいうまでもない。しかし珍しい名である。周達生『中国食物誌』（一九七六年、大阪創元社刊）一三八ページによると

「（中国の）淡水魚類で、最も古くから養殖されていたのは（鯉）（コイ）であった。それは、紀元前一、〇〇〇年ごろに始まつたと伝えられている」とあるが、史料を明らかにしない。鯉に関する最古の文献は『詩経』陳風衡門章で

豈其食魚 何んで魚を食おうとて

必河之鯉 黄河の鯉には限りませぬ

というのが目加田誠先生の訳（平凡社『中国古典文学全集』第一巻『詩経・楚辞』一一四ページ）である。養殖しなくとも中国の河や湖いたるところに見られるのである。

七、儒者

寺小屋の進歩したのが塾で、寺小屋が子供相手であった

に對し、いまの中生から大学生相手の教育を施したのである。そろばん塾というのがあったことは、思い出したが、江戸中期以後は各地に開かれた。名高いのはもとより松下村塾であるが、今では塾といえば天下の慶応義塾で、わたしの好きな堀口大学先生は先師春夫先生とともに同学の中退学生である。塾の気風になじまなかつたのではなく、お二人とも朝寝坊だったからが、単純な退学理由だったろうと思う。

話がとんでもないところへいったが、江戸の塾は四書五經を中心とした敵しいしつけをする場所であった。ただし儒者の常として世事にうとく、川柳のよきテーマとなつた。

家持の次に並ぶが論語よみ

『柳多留』初篇の句である。町内で家主の次に坐つたのである。

師匠様親類書の伯父に成り

わたしなども姪むすめの親族書には麗々しく書き連ねられたが、甥姪で独身は甥一人となつた。

じやまに成る柱の多い夜講釋

三篇（明和五年撰）、これは聴講者の多い夜講釈の場所に

は、中柱が立っていて講師の顔も見えず、講話も柱に妨害されたことをいっていると思う。今は大講堂でマイクを使用するので、三、四百人なら平気である。

五篇（明和四年秋より五年秋までの句）には

店ちんでいひこめられる論語よみ

の句が見え、儒者の採用した教科書の第一は『論語』であったことが、初篇の句とともに明らかにする。

六篇（明和八年秋板行）には

九郎どの五常を守り／＼にげ

の句が見え、九郎判官義経が仁義礼智信の五常を守って、兄頼朝に抵抗せず吉野、北国、平泉まで逃げのびたという。二代目竹田出雲らの『義経千本桜』の初演より二十年以上たち、謡曲『安宅』で弁慶の忠義、同じく謡曲『二人静』で衣川の最後は知識人には知られていたのである。

八篇（明和八年刊）の

喰ものにかけては孔子むづかしい

は塾で習った『論語』述而篇の「子在齊、聞韶三月、不知肉味」の箇所か、同篇の「子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣」かの飲食についての無関心をいっているとわたしは解く。誤解でなければ幸いであ

る。

十篇の

和漢の書ちんば引き／＼そらんずる 仙郎

は安永末(四年)の作、わたしのことをいっているかどひが
ませる。同じく十篇の

なんだかと左官ろんごをめッけ出し

わたしは寺田范三編『論語』(昭和十四年、慶文堂書店)を
やっつめッけ出した。

十一篇は安永五年の撰で

おらが大屋は小人せうじんと儒者はいひ

とある。家賃をためたのであらう。十一篇にはまた

かし本屋げだいはかりのがくしや也

とある。わたしはこれを「出版屋うれ行ばかりの勝負な
り」と書きかえ「大学者当世はやりをよく見つけ」と皮肉
らずにすまない。「エロ」、「グロ」、「イット」、「ナンセン
ス」はむかし、今の流行は？ わたしは知らない。

十二篇は安永六年の撰。

ねころんでろんご見て居る暑い事

これは儒者でなく教え子の方であらう。わたしは『論
語』をよむと若かったころに帰ってしゃきつとする。いわ

ば心の姿勢を正すのである。

八、唐人

わたしが先祖を中国人だと『ユギト』という雑誌に書い
たのは、昭和十三年八月と十五年二月のことで、前者は日
本軍が張鼓峰でソ連軍と衝突して大敗した前後の執筆、後
者は野村外相が米大使グルーと日米会談をはじめた前後で
ある。中国を日本は侵略し、武漢三鎮は攻略したが、まだ
手ごわいと見ると汪精衛(兆銘)と日華協議記録に調印し
た年が昭和十三年、わたしは教師をやめて上京し、参謀本
部から金をもらって「中國史上の謀略」というのを調査し
報告した。昭和十五年には亜細亜文化研究所という大東亞
省(という省があった)の外郭団体の最故参の研究員で「二
十四史外国伝の研究」というのを恩師和田清先生の指導の
もで行ない、満洲史の部を担当した。唐人の研究より、こ
れを囲む夷狄の研究の方が日本人は得意である。わたしも
その例にもれなかつたのである。前おきが長くなつたが川
柳では唐人はどう詠じられているか。

どんじりに乗る唐人は算がたけ

が『柳多留』二篇(明和三年刊)の「それ／＼な事／＼」に
着く前句である。長崎へ来る唐船の船尾にいる唐人は会計
係とでもいう意味だろうか、一向おもしろくもない。次が
十九篇の

みみたぶのわるい唐人つかにつき(成り万)

で、これも難解である。同じく二十一篇(天明六年撰)の

ふくろ持で無いまた唐人くぐり(高砂)

もわたしには解けないが、二十二篇(天明八年)

虫の知る事を唐人気がつかず

は唐人の犬気大様をほめたかと思ふ。

二十三篇(寛政元年)の

唐人ンと布袋せなかを合せてる

は七福神の寿老人と布袋とのことをいふかと思ふがどうであらう。喜多川守貞『類聚近世風俗志』(昭和四十五年、魚住書店再版)の挿画を見てもはつきりしない。

二十九篇(寛政十二年)の

唐人は瓜と李を大事がり 雨潭

は石山福治『最新支那語大辞典』(昭和十年、第一書房)によれば「瓜田李下」、「瓜李」、「瓜季之嫌」と三語を挙げてい
る。「瓜田ニ履ヲ納レズ、李下ニ冠ヲ正サズ」は『古樂府』

「君子行」からである。

三十二篇は三十一篇が文化二年であり、初代川柳も死んだあとではあるが

唐人は平の竹輪をくひのこし 市風
と詠じている。句も面白くないので、この項は終る。

九、張飛

『三國志演義』は江戸の知識人の愛読書の一であって、諸葛孔明、関羽、劉備、曹操と善玉悪玉ともに関心の的であつたろうが、川柳では孔明が後に出るほかは、張飛がまず出て来る。すなわち三篇(明和五年撰)に

夜講釋張飛びいきはほうかぶり

と見える。わたしには難解なので類句をならべる。

夜講釈杖で来ルのはけたいなし(二篇)

夜かうしやくなどいひ／＼再發し

(『柳多留拾遺』六篇)

これでもわからないので、張飛を詠じたものをならべてみる。

桃の花見イ／＼張飛引つかける 古柳

『柳多留』二十六篇

孔明に対する三顧の礼に春さきのこともあつたらうといふのである。

耳たぶと見込に張飛義を結び 和里

『柳多留』五十篇(文化八年撰)に見える。小川環樹・武部利男共訳『三國志通俗演義』(岩波書店、昭和四十三年二版)四ページには劉備は「耳は肩までたれさがつて自分の目で見る事ができ」とある。桃園の義兄弟の契りの理由はこの福相を張飛が見こんだというのである。五十四篇(文化六年撰)では

あつ畑で引かけ張飛雪の供 和文

とあり、三顧の礼のうちに雪の季節があつたというのである。

十、孔明

諸葛孔明の『柳多留』の初見は初篇の

すゝ掃の孔明は子を抱いて居る

である。すす掃の類句を集めてみると

すゝ掃の下知に田中の局が出(初篇)

煤掃に装束過て笑れる(同右)

すゝはきに一人りか二人りばかな形り(二篇)

すゝはきに玄関で着直が出来る(三篇)

すゝ拂けふのかたびらむね合す(同右)

けふは希婦と索引にある(岩波文庫『柳多留』)。

すゝはきの御せちがいわむ納也 伊呂波琴亭(十五篇)

すゝはきにあるき袖口外へかけ(十六篇)

すす掃きには笹竹が必要である。

すゝ竹をうりに来たのへたけ林

竹林の七賢をかけていることはいふ迄もない。

すすはき竹や竹と只七は売(二十篇)

四十七士の竹林只七を揚げているのであるが、行商中に基角に遭つて詠じたのが「年の瀬や水の流れと人の身はあした待たるるその宝舟」で、売り歩いたのは、正月二日用の七福神の画であり、竹林只七ではなく大高源吾である。

さて孔明が『柳多留』に出て来る第二首は十二篇(安永六年撰)である。

孔明がうつむいて居るむづかしさ

どれ程なことか孔明首をまげ(十三篇)

中国一の智者にも難題があるといふのである。次は二十

二篇（天命八年撰）で

しよかつりやういゝ手廻しの石を居ゑ 嘉樂

これは諸葛亮の戦術の巧みをほめ、二十六篇（二十五篇は寛政六年撰）では

けふも又留守でござると諸葛亮 完示

と再び三顧の礼を詠じ、同篇にはまた

先生お目がさめたかなと玄徳 松歌

と同じく三顧の礼をとり、孔明に会う。

遊芸を孔明一度用に立て 玉章

孔明は松も通はぬ琴を弾き 四連

はともに難しいが叔父諸葛均に育てられその死後は南陽で農耕生活をおくり、梁父の吟という歌を作ったことは有名である。『三國志演義』ではどうなっているか、前述の武部利男さんらの概略を見たが「小舟にのつて川あそびすることもあり（中略）ほら穴の中で琴や碁を楽しんでゐることもあり」というのが、弟の諸葛均の劉備に答えた三顧めの時のことばである。

三十一篇（文化二年）の

孔明がひいたも生田流と見え 如雀

では当時の生田流の琴のはやりが考えられる。三十四篇

（文化二年）の

雪中にふしたる龍をとらまへる 木賀

は同じく、三顧の礼で月並である。三十六篇（文化四年）の

爪先もはたらいたのは諸葛亮 柳雨

は軍師としての孔明をはめる久しぶりの句である。

玄徳は三度見舞て食くづかせ 是樂

は三十九篇（文化四年）で同じく三顧の礼。

同篇の

孔明と正成智恵をすぐり出し 玉章

は講釈に『太平記』と『三國志演義』とがもてはやされたことを証明し、四十三篇（卯小春催辰發行とあるから文化五年撰）の

佛師屋へ遺言にする諸葛亮 集馬

は蜀の建興十二年（魏の青龍二年、西紀二三四年）の孔明の祁山への出馬の前の覚悟であろう。四十六篇（文化五年刊）の

孔明をもふ二三冊生かしたい 吹唐

は『三國志演義』の愛読者の言である。

十一、漢学者

最後にこの機会に漢字を教え、漢文を教える者として、江戸時代の漢学者観との異同を検する。『柳多留初篇』に先生と呼んで灰吹き捨させる

がタバコ好きのわたしとして大変うれい句である。先生はわたしの兵隊経験（河北省唐県・望都県）では「さん」であり、教師経験では同僚ならびに学生からの呼称である。灰皿を捨てにゆくのは講師控室の事務員さんでこんな待遇を受けたことはない。次に六篇（明和八年刊）の

じやうだんに談義などきく花戻り

もわたしの経験ではないが、嫁入道具の文学士称号、クラブ活動のための通学にわたしは割合い寛大である。同篇の師のかげを七尺去ると人形書

は前掲の『岩波文庫』本では「人形書」のよこに「もう遊び（天三）」とあり十二年後の天明三年にはこう直されたのである。わたしの学生たちはわたしをいたわって後から来るが、講義がすむともう遊び、卒業するともう忘れる（例外はあってわたしが四年半教えた中学生と、わたしが六年い

た女子短大生とは年賀状をくれる）。

八篇（安永二年刊）には

しんのじゆ者命なるかなと穴でいひ

前述の始皇帝の焚書坑儒をいっているので、「命なるかな」は『論語』の「雍也」第六の

伯牛有疾。子問之、自牖執其手。曰、亡之。命ナル矣夫。

斯人也而有此疾也、斯人也而有斯疾也。

という箇所を引いているのであるが伯牛（冉耕）の疾はハensen氏病だったと思われる。「命矣夫」の引きかたは従っておかしいのである。

九篇（三年刊）には

いさゝかな道をあらそふ禮のとも

というのが見える。このころの漢学者で江戸に在住したのは、入江南溟の養子入江北海（寛政元年歿、年七十）。荻生徂徠の子金谷（安永五年歿、年七十四）、植木筑峯（安永三年歿）、鶴殿士寧（安永三年歿、年六十五）、井上金峨（天明四年歿、年五十三）、大竹麻合（寛政十年歿、年七十二）、大内熊耳（安永五年歿、年八十）、大谷永菴（安永九年歿、年八十二）、久保虚齋（天明五年歿、年五十六）、久世静齋（天明四年歿、年五十三）、梁田象水（蛻巖子、寛政八年歿、年七十六）、松山天姥（天明三

年歿、年五十八）、松村梅岡（天明中歿、年五十四）、江村北海（天明二年歿、年七十六）、平賀鳩溪（通称源内、別号風來山人、福内鬼外、安永八年歿、年五十七）。大正四年、鹿島桜巻編『儒林名鑑』によってざっと列挙した。江戸に安永二年の前後に活躍した儒家たちでは平賀源内以外はわたしは名も知らない。富士川英郎博士の著書はまだ届いていないのである。これらの儒者（礼のとも）たちの道の争いについても、わたしは全く知らないし、知ろうともしない。

十一篇（安永五年刊）の

もとぶりを直して孔子たのみましょ

も難句であるが、儒者が経書を読むに譬を正しくすると解しておこう。わたしも本は（新書、文庫をのぞく）姿勢を正して読むこととしている。十三篇（安永七年刊）の

大學ををしへ切らずにこして行

の『大學』はもとより四書之首篇である。それをも教えずに越して行く学者の行く先は？ わたしはあと半年で定年になれば過して行く先はもうきめている。

十四篇（安永八年刊）の

こいつだと孔子をうしろ手にしぱり

は難解である。わたしは『史記』卷四十七「孔子世家」を

よんで、「孔子年五十六歳の時、匡（いま河南省滑川県）を通った。匡の人は魯の陽虎と見まちがえてこれを捕えた。陽虎は前に匡の人間に暴行したのであるが、孔子は顔がこれに似ていたのである。人違いが判明したのは五日後であった」との記事を見出して大喜びした。

十四篇（安永八年刊）の

子曰おふくろをあやなしやれ

は「あやなしやれ」がわからなかったが、国語辞典では「うまくあやつる」、「巧みにあつかう」とある。これも孝行の一便法であるが、「孝行」を扱った句は多い。

孝行をしたい時分に親はなし（二十二篇）

孝行は霞と霧におやに逢ひ 鳳頭

二十六篇（二十五篇は寛政六年、二十七篇は寛政九年の撰）の句で、春秋の彼岸の墓参をいうことは、前句と同じである。二十七篇の句は

神國の徳には孝の數しれず 錦鳥

中国の二十四孝どころではないというのである。しかし、江戸の孝子の名はわたしの脳裏には残っていない。二十八篇（寛政十一年刊）には

雪や氷とへだつれど同じ孝 和谷

雪中の筈を掘った呉の孟宗と、裸になって氷を解かして二尾の鯉を手に入れた晋の王祥の二孝子をよんでいる。王祥のことは尾形仙教授に教えていただいた。この句と並んでいるのが

子を掘ると子を埋めるのを孝に入れ 春駒

で、竹の子を掘った孟宗と、貧しくて母の食を十分にしようとして、地を掘り子を埋めようとの孝行が報われて、黄金を掘り当てた晋の郭巨とを『二十四孝』（元の郭居敬撰）で知っているのである。

三十六篇（文化四年刊）には

手遊を古郷へかざる老萊子 三松

とあり、二十四孝の一人である老萊子が出て来る。老萊子は戦国の楚の人で、両親に仕え年七十にして嬰兒のたわむれをし、五彩斑斕の衣をつけ、堂（奥座敷、両親の坐所）に上って跌たふれて嬰兒の啼きをしたという。儒者が孝を説くのに二十四孝の例をあげたことは疑いない。

三十七篇は文化四年の撰で

眞直に天までも行孝の道 五人

の句が見える。孝が儒教の実践の第一で、天道なのである。

文化巳の年（六年）撰の四十八篇には

子が老をおぶうで孝といふ字なり 如雀

我老をわすれて孝の舞うたひ 一徳

の二句がならんでいる。同じく儒教の孝道を説くが、二句目はまた老萊子である。同篇の

孝行で踏めば氷も薄くなし 青露

はまた王祥の故事である。

四十九篇（文化七年撰）には

時にあはぬで聖人も壁にされ 瓦合

と焚書坑儒の時に経書を壁にぬりこめたことをまたいう。同篇の

ふんとして名をさらしたはひん學者 一徳

については諸橋轍次博士の『大漢和辞典』巻七「犢鼻褌」をひもとくと「阮仲容（諱は咸、晋の人、詩人阮籍の従子）が貧で、七月七日に竿に大ふんどしをさらし、人が怪しむと『貧乏なくせに俗を免がられないのだからこうするのだ』と答えた」と『世説新語』（劉宋の劉義慶撰）にある」由である。富んだ一族たちは紗羅錦綺の衣裳をさらしたという。